

ク レ ス ピ ・ ダ ッ ダ

－「労働者の理想郷」－

Crespi d'Adda

－perfect workers' village－

渡辺 邦博

Kunihiro Watanabe

1. まえおき
2. クレスピ・ダッダはユートピアか？
3. クレスピ・ダッダ
4. クレスピ・ダッダの村
5. むすびにかえて——ユートピア、社会主義、逆ユートピア

キーワード：（企業村）（イタリア世界遺産）（ロバート・オウエン）（ユートピア）

1. まえおき

—「企業家と労働者が共に生活し、後者の働きやすい環境を整えれば、やる気が喚起されて生産力も上昇し、可処分所得が向上して、消費需要の増大に繋がる」—

以下に紹介するのは、この施設のHP（<http://www.villaggiocrespi.it/>）冒頭にある解説の抜粋である。

「“クレスピ”は、＜イタリア、筆者注＞ロンバルディア州屈指の綿織物工場主だった家族の名前であるが、この家族は、19世紀末、アッダ川のベルガモ県側川岸に建設した綿織物工場の傍らに、モダンな“労働の理想郷”を建設した。⁽¹⁾

何も存在しなかった土地に、工員とその家族のために建設された村。工員たちには、庭と家庭菜園付の一戸建住宅と、必要な全ての施設が提供され、この村の中では、城にすむ主が村の全てを統治し、文字通り“ゆりかごから

⁽¹⁾ 「クレスピ・ダッダ」の創立者クリストフォロ（Cristoforo Benigno Crespi, 1833-1920）は、上記HPによると、1833年生まれで、ブスト・アルシツィオ（Busto Arsizio）出身の繊維生産者の家族に先祖を持つ、アントニオ・クレスピ（Antonio Crespi）家の長男であった。元来彼は父親の事業を手助けしていたが、家族と共に、ヴァプリオ（Vaprio）、ヴィジェーヴァノ（Vigevano）＜いずれもロンバルディア州＞やゲンメ（Ghemme）＜ピエモンテ州＞などに綿織物工場を始めた。1878年彼は、クレスピ・ダッダに工場を建設して、もっとも近代的な、紡績、織布、仕上げ行程を導入した。

1884年彼はミラノに移住して、ボルゴノーヴォ（Borgonuovo）通りに邸宅を構え、そこに自らの会社の本部を開設した。彼はまた、膨大かつ広範な感嘆すべき絵画のコレクションを保有していた。1904年にトレットツォ・スッラッダ＜クレスピ・ダッダの北方1キロほど＞の水力発電所を建設した。彼はいくつかの栄誉を授与されたが、その中には、カヴァリェーレ・デル・ラヴォー功労章（Cavaliere del Lavoro）とイタリア王室騎士勲章（Commendatore della Corona d'Italia）が含まれる。彼は1920年ミラノで没した。次ページは、クレスピ・ダッダにあるクリストフォロの像である。

墓場まで”、工場の内外で、まるで父親であるかのように、20世紀の社会保障を先取りし、従業員たちに必要な全てを与えた。村に住むことができたのは工場で働く工員だけで、工員の生活の全て、村のコミュニティ生活の全体が、“工場を軸に”、工場の都合により、工場のリズムで動いていた」



そして、「時をさかのぼる旅の準備をして、クレスピ・ダッダが誕生した1877年に日程を合わせると、他ならぬ会社村なるものの素晴らしい実例が、計画と建設の完成後に、まるでガラスの中で保存されていたかのように、ほとんど手つかずのままの姿をあらわす」⁽²⁾のである。

ユネスコの世界遺産会議は、“南ヨーロッパにおいて、最も完全且つ、良好な状態で保存されている、工員村現象の貴重な例”として、1995年にクレスピ村を世界遺産に登録した。

それ登録条件は、二つに相当すること。

1. 人類の歴史の重要な段階を物語る建築様式、あるいは建築的または技術的な集合体、あるいは景観に関するすぐれた見本であること

2. ある文化を特徴づけるような人類の伝統的集落や土地利用の顕著な見本であり、また、特に抗しきれない歴史の流れによってその存続が危うくなっているもの



である。

この工場については、1928年、世界恐慌の渦に巻き込まれたクレスピ・ダッダの二代目経営者シルヴィオ⁽³⁾が、労働者を誰一人として解雇せず、莫大な借金を重ね、破産の道を選んだ。クレスピは、労働者たちを新しい経営者に委ね、自らの美しい夢にピリオドを打ったのである、とされている。⁽⁴⁾

＜現地北にある高台から労働者住宅群や教会などを臨む。残念なことに、領主の館＝クレスピ

⁽²⁾ 後述、Commune di Capriate San Gervasio, *Crespi d'Adda*。

⁽³⁾ <http://www.villaggiocrespi.it/> 世界遺産ホームページによると、クリストフォロの息子は、1868年にミラノ生まれ。21歳の時法律の学位を取得し、綿生産の発展をたどるためイングランドに数年を過ごし、経営者として父親の工場において、1889年活動を開始した。粘り強く、倦むことのない性格をもって、彼は、産業上から、政治的・財政的諸部門にも及ぶ、数々の諸活動に専念した。彼は、事業の障害に先手を打つ研究を公にし、書き著した。彼は、木綿生産者連合の初代会長であり、産業ならびに商業最高会議の一員であった。彼は、イタリア商業銀行と、イタリア自動車クラブの会長でもあった。

彼は、カトリック自由党の代議士、元老院議員であり、議会内で、労働者の状態に特段の関心を持ちつつ、産業と商業を振興した。彼は、第一次世界大戦終結にあたり、全権大使に指名された。

城は、ホテルの向こうにわずかに塔が見えるだけである。>

2. クレスピ・ダッダはユートピアか？

上記の説明文の一節に「労働者の理想郷」とあるが、HPの各国語版ページを参照しても、ドイツ語 ideale Arbeiterstadt、イタリア語 città ideale del lavoro、フランス語 cité usine idéale、英語 perfect workers' village、とそれぞれの言語での該当語が分かるが、イタリア語の「労働者の理想村」が精々のところで、「理想郷」と言うことから「ユートピア」を想像した筆者は、そのニュアンスに過剰反応してしまったのかも知れない。⁽⁵⁾

この種のこころみの代表としては、ロバート・オウエン (Owen, Robert, 1771-1858) のそれであろう。そこでここでは、オウエンの実験との比較と言う形で、この「遺産」を紹介することにしたい。

オウエンは、ウェールズのニュータウンに生まれ、イギリス社会主義・労働運動の父であり、同時代フランスのサン・シモン (1760-1825)、フーリエ (1772-1837) とともに3大ユートピア社会主義 (空想的社会主義) 者と言われた。産業革命の時代に、スコットランドのニュー・ラナーク綿紡績工場を経営して、その労務管理思想を、啓蒙思想から継承した諸観念 (とくに人間の性格形成に際しての環境決定論と完成可能性論および功利主義論) と結合して社会改革に献身した。⁽⁶⁾

オウエンの多岐にわたる業績の中から、ニュー・ラナークについて、若干のことを述べておこう。この実験工場

⁽⁴⁾ <http://www.tbs.co.jp/heritage/1st/archive/20020721/onair.html>

本文に利用したHPには、「クレスピ村あれこれ」として、いくつかのトピックが掲載されている。ここはイタリア初の近代的エンジンシステムによる公共イルミネーションを備えた村、この村の学校では教科書やペン、子どもの上っ張りから給食、先生の給料から住宅に至るまで全て工場から支給、会社が支給した無料施設の一つには、シャワーや更衣室完備の温水プールもあり、ベルガモ県にありながらもミラノの市外局番が使われているのは、クレスピー族がミラノの屋敷からこの村まで私設電話線を引かせたから、創始者の長男シルヴィオは第一次大戦後のベルサイユ条約締結のイタリア全権大使であった、創始者の兄弟ベニーニョはイタリア第一の日刊紙「コリエレ・デッラ・セーラ」の創刊時代のオーナー、レーシングサーキット愛好者のシルヴィオはイタリア初の自動車専用道路建設を推進、創始者クリストフォロの収集した絵画は、ティツィアーノの「ラ・スキアヴォーナ」をはじめ、世界中の主要美術館に所蔵されている、村の教会は完全なルネサンス様式であるが、クレスピー家の故郷=ブスト・アルシツィオ教会の実物のコピー、教会と城は一直線上に建設されているので、城の塔上から教会の祭壇を見るのが可能、などなどが紹介されている。

⁽⁵⁾ マンフォード・月森左知訳 [1997] は、第一次大戦後の荒廃した世界を目のあたりに、プラトンの「国家」からトマス・モアを経て、H・G・ウェルズに至るユートピア作品を検証したものだが、オウエンがユートピアの思想の流れの中心的存在として紹介されている訳ではない。ユートピアの日本語訳としては、理想郷とされる場合がある。しかし、「どこにもない」との意味を表現するには、「無何有郷」の方がよいと思う。

⁽⁶⁾ ロバート・オウエンについて、岩波書店辞典編集部 [2013] には、以下のような叙述がある。サン=シモン、フーリエと並び、初期社会主義者として高く評価されている。北ウェールズの生まれ、小売業者の子で、小売業者として各地を転々として、産業革命の進行、労働者の困窮、墮落を目撃して、マンチェスターの紡績工場の支配人となり、種々の改良によって成功、ニュー・ラナークの大紡績工場の共同所有者ならびに管理人としても成功した。労働者の生活改善、幼少年子弟の教育に成果を挙げ、世界初の幼児学校 infant school や、職工の日用品を販売する工場共済店舗を開設した。『新社会観』 *A new view of society*, 1813, 『現下の貧困の原因』 *A explanation of the causes of the distress*, 1821. などを出版して、労働者の待遇改善、工場法その他の労働立法の必要を提唱、女性ならびに児童労働の制限に関する最初の法律の通過に貢献し、次第に博愛主義から社会主義に移行した。また、貧民階級のための共産社会の建設を提案し、私財を投じてアメリカのインディアナ州にニュー・ハーモニー New Harmony を設立したが、失敗して帰国。次いでクイーンウッドの共産社会でも失敗した。私有財産制度、既成宗教、現行婚姻制度を攻撃し、上層社会や新聞の非難、黙殺を受け、工場経営からも退いて財産を失い、自らも労働者階級の一員となって運動を続けた。また、協同組合を提唱して、Co-operative Congress を結成、労働時間を単位とする労働証券<労働貨幣>による労働生産物の交換施設 National Equitable Labour Exchange を創設するも失敗。その後も労働組合の連合に努力、全国労働組合連合 The Grand National Consolidated Trades Union を成立させ、第一回大会議長となったが、政府の弾圧と内部分裂とによって数ヶ月で崩壊した。のちチャーチストなどの政治運動から離れ、精神更生運動に没入し、窮乏の中に没した。

について、その建設者オウエンは、以下のように考えていた。⁽⁷⁾

ナポレオン戦争終結後、グレート・ブリテンは1819年の過渡的恐慌に疲弊していた。オウエンは翌1820年5月『ラナーク州への報告』*Report to the county of Lanark, or plan for relieving public distress, and removing discontent, by giving permanent, productive employment, to the poor and working classes; under arrangements which will essentially improve their character; and ameliorate their condition; diminish the expenses of production and consumption, and create markets co-extensive with production.* By Robert Owen. Glasgow, 1821. を起草、翌年1月にそれを公刊した。自らの『自叙伝』でも述べているように、「この報告書においてはじめて、……全人類のため有益に性格を形成し人間性を陶冶するための、一つの合理的社会制度を組織する科学を解明した」。そこでオウエンは、1819年の戦後恐慌とその結果生じている失業を、富の過剰生産とそれに伴わない過少消費に求め、労働者階級の勤労に対する報酬が良いか悪いかに応じて、市場は広くもなり狭くもなると説明している。

オウエンは、協同社会における労働証券を提案し、およそ800から1200程度の人数で、一人当たり1エーカーの農地を基準におよそ800から1200エーカーの耕地と、住居、協同の炊事場、食堂施設、教育施設、公共施設などの「平行四辺形」の建物からなる協同村の提案を行っている。



＜オウエンの生地ウェールズ・ニュータウン＞



そこにおいて、犁（plough）耕に比べると労働の生産性が劣るが、雇用を拡大する鋤（spade）耕作を行えば、土地の生産力と再生能力の点で期待が見込める自給自足的な村の経営が可能である、と主張している。これをオウエンは、その故郷ウェールズの農村をモデルに構想をしたと言われる。

その後オウエンは、北アメリカに渡ってさらにニュー・ハーモニーの実験にも携わるのであるが、本稿ではニュー・ラナークの紹介だけに止めたい。⁽⁸⁾

ユートピア思想史を紐解いてみても、オウエンがその中で大きな位置を占めている様には思えない。もともと、ユートピアとは「どこにもないところ」だから、「どこかにあった実験」はユートピアではない、と判断されるのだろうか？⁽⁹⁾

⁽⁷⁾ 丸山 [1999] 第1章、第2章による。

⁽⁸⁾ オウエン以後、村は放置され荒廃していたが、ニュー・ラナーク保全財団（1974年設立）によってテーマパークとして復興、再生され、2001年にはユネスコの世界遺産に登録されている。

3. クレスピ・ダッダ

汗牛充棟とも言えるニュー・ラナーク研究史に比べると、このクレスピ・ダッダは関係資料・情報が少ない。以下では、現地のインフォメーション・オフィスで入手した、カプリアーテ・サン・ジエルヴァージオなるコムーネ発行の「クレスピ・ダッダ 世界遺産」を参考に、世界遺産のウェブサイトなどを加味して紹介を進める。

イタリア北部を横断する国内最長の川、ポー（Po）川に合流するアッダ（Adda）川は、アルプスに源を発して、ロンバルディア州を南下する。

クレスピ・ダッダを囲む環境はユニークなものである。この村は、南側では二つの川の合流点により、北部では“フォッソ ベルガマスコ”と呼ばれる高低差によって境界を定められ、低地をなす三角州をその発祥の地としている。

二つの川とは、アッダ川とブレンボ（Brenbo）川のことで、両方が“イソーラ・ベルガマスカ（Isola Bergamasca）”と称される半島を形成している（村は、その半島のまさに先端に位置しているのである）。“フォッソ ベルガマスコ”とは、かつてはミラノ公爵とヴェネチア共和国との間の境界線を表すものであった。こうした地理学的に隔離されている事態は、この村が北側からしか外部とのつながりが無いとの事実によって際立ったものとなっている。現代では、以上のような地理学的な特徴と、その隔離に助けられて、どんな理由で、クレスピ・ダッダがその周辺の混沌とした発展から隠れて、距離を持った状態を保ち、普通でない形で保存されえたかを、われわれは、理解することができる。

この村の基本構想は、現ミラノ・マルペンサ空港近傍の、ブスト・アルシツィオ出身の紡績企業家（高貴な身分の人物）が、啓蒙的かつ温情的な思想を基礎にして、工場用地を探索した結果、ベルガモ県のアッダ川沿いに耕作放棄された荒廃地を見つけ、そこに工場を建設することに決めたことに始まる。立地は、動力源としての豊富な水量を確保でき、近隣の町からの労働力が見込まれた。後述するように、すでに西ヨーロッパでは18世紀後半に産業革命が開始され、石炭や蒸気機関を利用した技術革新が満面開花された状態であり、19世紀末のイタリアでも、水力を動力として生産が行なわれた、その点19世紀初頭のオウエンの実験に通ずるものがある。上記の小冊子には、水力タービンをバックに当時の工員たちの写真が掲載されている。

＜コムーネ発行の小冊子＞



クリストフォロの構想が実現の緒に就いたのは、1877年、アッダ川とブレンボ川が合流する三角地帯に建設が始まった時のことである。水流を変え、タービン設備を設置して紡績部門を立ち上げ、5000の紡錘を据え付け、労働者たちの当座の住居を建て、もっとも肝心な事業である、カフェテリア、学校、ホテルや店舗などを用意して、1878年7月25日に生産が開始された。

⁽⁹⁾ 通常、社会主義を「空想的」と「科学的」に分類するに際しては、体制移行のプロセスを明確にしているかどうかが挙げられるが、ここで言うオウエンのような空想的社会主義による社会批判には、変革の主体としてのわかりのよい支配階級の自己放棄に期待したとしても、資本主義の生産力の継承との視角が存在したのを忘れてはならない。水田 洋/水田 珠江 [1971]、14ページ。

この工場は急速に拡大して、1886年に最初の労働者住宅が建設され、1889年にはクリストフォロの息子のシルヴィオ（Silvio Benigno Crespi, 1868-1944）が紡績工場の経営者となった。著名な建築家や技術者たち⁽¹⁰⁾の助けを受け、この息子は均整の取れた計画に従って、村の設計を行ない、生産、家族生活、ならびにコミュニティ・ライフに役立つ様々な区域を作り出した。村の設計計画は傑出したものであった。工場が川に沿って配置され、その隣にクレスピ家の城がある。労働者の住宅は、英国風の考えにもとづいて、工場の東側に平行する道路に沿って整然と並んでおり、南側には職員や管理職のための非常に美しい邸宅群がある。医師や僧侶の家屋が丘の上からこの村を見下ろしており、教会や学校は工場に面したところに、並んで置かれている。

クレスピ・ダッダには、古典様式からロマン様式へと変化する、広範なスタイルが存在している。

城が中世の様式の再生産したものだとすれば、教会は、クレスピー族の生誕の地であるブスト・アルシツィオの、ルネサンス様式を採用していた、S. マリア教会の寸分違ふことのないコピーである。その他すべての建造物は、典型的ロンバルディア風ロマン様式で、高価なレンガの装飾を施し、金属の仕上げで細工された、ネオ・ゴシック・スタイルであった。工場自体は別の様式で、その最高レベルが、壮大な管理棟とともに、正面玄関に現れている。

異国的であるとともに折衷的な共同墓地は、国民的な記念物であり、セメントで出来た、装飾を施された塔のあるピラミッドを持つ、クレスピの礼拝堂によって特徴づけられる。



＜アッダ川を渡り、
東側のクレスピに至る＞

この村を建設したのはクレスピ家であったから、工場生産の成否が命運を左右したし、そこでの労働者の生活は、一族の采配にかかっていた。われわれには未だ詳らかでないが、組織の規律は厳格なものであったとされている。

それでもこの村は、いくたの浮沈はあっても、世紀の境目を超えて繁栄を継続したが、20世紀初頭の世界不況までは命脈を保ったのであった。

4. クレスピ・ダッダの村

上記 Crespi d'Adda, Patrimonio Mondiale dell' Umanita, UNESCO World Heritage Site には、訪問者のための村の全体図が盛り込まれているが、それによって、その概要を紹介する。⁽¹¹⁾

以下、アラビア数字は冊子のオリジナルで、私たちが写真を撮ることが出来たものは写真も提示している。

⁽¹⁰⁾ 村の奥にある墓地は入り口に大きな鉄の扉があり、それを入ると中央に大きな道が通っている。その両側には労働者の墓がある。中央には三角形のタワーがあり、これは1906年から1907年にかけてガエターノ・モレッティによって建設されたもので、この村の創設者クリストフォロ・ベニーニョの家族や工場で働いていた労働者たちが眠っている。

⁽¹¹⁾ 一部だが、以下のHPも利用した。http://www.villaggiocrespi.it/jp/



＜クレスピ・ダッダの工場正面＞

1 住居



2 城主の館

残念ながら写真を提示できない。

3 医師の住居

残念ながら写真を提示できない。

4 牧師館

残念ながら写真を提示できない。

5 教会



6 洗濯屋

残念ながら写真を提示できない。

7 憩いのクラブハウス

残念ながら写真を提示できない。

8 ホテル

残念ながら写真を提示できない。

9 学校



10 労働者住宅



12 病院

残念ながら写真を提示できない。

13 公衆浴場、ならびにプール



11 工場とその正面玄関



14 <店舗>と松林



15 職員住宅



16 役員住宅



17 墓地



18 農場

残念ながら写真を提示できない。

クレスピ・ダッダへはミラノ中央からの地下鉄とバスの利用が考えられる。⁽¹²⁾

資料が十分ではないが、その限りでこの施設をまとめておこう。

i) オウエンの計画は、体制変革の思想を持ち、その志向を有していた。それに対して、このクレスピ・ダッダは、市場とは異なる共同的な組織と言った考えもないだろう。自給自足の概念にもよるが、絶海の孤島、深山幽谷、宇宙空間などを想定しない以上、外界との接触は当然である。オウエンのニュー・ラナークでも、一戸あたり数百エーカーの農地を想定していて、村の中での自給が考えられていないでもないが、孤立した状態が常態とも考えられない。このクレスピ・ダッダも、地理的には北部にしか開かれておらず、労働者住宅には庭すら備わっているが、製品の取引も存在するから、個立を目的としたものではなく、自律的な村と解釈するのが妥当である。「あれこれ」にうかがわれるように、経営者クレスピー一族の活動を見ても、閉鎖的共同体には程遠い。

⁽¹²⁾ ミラノから：メトロ2 (M2) に乗車し、終点ジェッサーテ (Gessate) で下車。そこから NordEst社 (ATMグループ会社) バスに乗り換えて、トレットツォ (Trezzo) で下車、クレスピ・ダッダまでは徒歩でおよそ25分。下記のサイトが訪れる際に参考になる。

http://matsuohj.com/Travel_Diary/Travel%20No_23.pdf

また、バスを降りてからの徒歩には、下記の地図が参考になる。

http://www.villaggiocrespi.it/imm/tutto/tutto_mezzipub.pdf

ii) 社会改良家オウエンは、ニュー・ラナークにも飽き足らず、アメリカやその他の地で実験を継続したり、社会運動を展開して工場立法の制定にまで、さらに生活協同組合、労働証券などにも拡大したので、オウエンの社会的側面が際立つ。

もっとも、両者は、そのキャリアを考えると、実務家として出発して、基本的には独学を通じてその思想を深化させたオウエンと、クリストフォロの息子シルヴィオは、イングランドに留学して、その経験を糧としたように思われるから、筆者には未知であるが、イングランドの企業家たちの実験から学んだことも少なくないと思われる。

iii) 敷地内を瞥見すれば、

まず、領主の城がオウエンの村にはない。

労働者住宅が一戸建てで、共同住宅ではない。

そうは言っても、クレスピでは労働者がすべて平等というわけでもなく、職員のランクにより、住宅も異なる。だから、クレスピ・ダッドは全員が平等との思想で建設されたものではない。

さらに、同時代の知見を動員した建築物や、クレスピー一家の生活を想起すると、文化的な側面でもオウエンとは異なると言わざるを得ない。

洗濯場や共同浴場、温水プール、教会・学校・工場の豪華なデザインは、平等社会を目標としたとは言えないのではなかろうか。クレスピー一家の実験は、19世紀後半の西ヨーロッパにおける経済発展ぬきにはありえない。運動の失敗を繰り返し、最後は貧窮のうちに死亡したオウエンとは、この点でも異なる。

やはり、社会全体の変革を目指したと言う視角ではなく、領主による啓蒙的な改革のイタリア版と考えられる。

およそ50年の経済活動の後、世界恐慌の只中で、一人の解雇者も出さず破産したが、現在でもなお労働者の子孫が村の労働者住宅で生活しているのを目の当たりにすると、企業経営家として岐路に立ち、どのような判断を迫られたか、その答えは単純ではない。

5. むすびにかえて—ユートピア、社会主義、逆ユートピア—

旧知のように、「ユートピア」とは、イングランド王ヘンリー8世 (Henry VIII, 1491-1547) に大法官として仕えた16世紀の人文主義者トマス・モア (Thomas More, 1478-1535) の構想した『ユートピア』 (*Utopia*, Nowhere, Neverwhere) に由来する「どこにもないところ」の意味を持つモアの新造語であった。彼は、架空の理想国家と当時のイングランドとを比較することで、同時代の社会の現実を批判して、「理想的な社会」を構想したのであった。ところが、ユートピアは、19世紀になり、それまで人類が経験したことのない「豊かな社会」が現実のものとなり、一部に社会の恩恵にあずからない現実があっても、理想社会を手がかりにして現状を批判するよりも、社会を変革することに思考パタンが移動した。まずは19世紀前半には初期社会主義が登場して様々な実験が繰り返された。さらに19世紀も後半となると、社会主義が影響力を増大し、数億の人口を有する国家を20世紀に誕生させることとなった。「科学的社会主義」としてのマルクス主義が、自分たち以外の社会主義を自らと区別する意味で、「空想的社会主義」 (F. Engels, *Die Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft*, 1882) と名づけるに至ったのである。「近代社会の運動法則」を解明すると称するマルクス (Karl Marx, 1818-1883) の主著『資本論』 (*Das Kapital*, 1867) においては、必然的に発生する恐慌と、それに連動した革命の後にはバラ色の「社会主義」社会が訪れると考えられた。⁽¹³⁾ しかし、20世紀末、その社会主義は70数年の実験の後、ロシアにおいてその幕を降ろし

た。これをもって、自由主義の社会主義に対する勝利と言われることもある。さらに、社会主義もまたは「ユートピア」に過ぎないと言われることさえ稀ではない。

「ユートピア」は、本来の役割、現実批判の迫力を喪失したのであろうか。鋭く現実を批判したのは、「逆ユートピア」であったのかも知れない。逆「ユートピア」は、明るい未来ではなく、例えば映画「猿の惑星」のように「暗い未来」を描くことで現実を批判するものであるが、社会主義の挫折ないしは失敗は、早い頃から「逆ユートピア」を生み出した。その典型として、ハクスリー（Aldous Leonard Huxley, 1894-1963）の『素晴らしい新世界』（*A brave new world*, 1932）32年や、ジョージ・オーウェル（George Orwell, 1903-1950）の『動物農場』（*Animal Farm*, 1945）、『1984年』（*Nineteen Eighty-Four*, 1949）をあげることができる。

クレスピ・ダッダでは、およそ半世紀の間、人間的労働環境の理想が追求され、その間労働争議を経験することなく、労働者は理想の職住環境が経験できたのであったが、1920年代の不況でその幕を閉じた。

ロバート・オウエンの構想に存在した初期社会主義と称される部分は、クレスピ・ダッダにはなかった。

しかしながら、労働時間、労働・住宅環境、学校・病院、共同浴場など生活に必要なサービスを無償で提供して、コミュニティの建設維持を行なった点は、オウエンの環境決定論に通ずる面を持っている。クレスピー族とオウエンの構想との間に何らかの接点があるかどうか、現在のところは不明と言うしかない。

オウエンのニュー・ラナークが、その思想を伝承する諸施設をエリアのなかに備えて、訪れる人たちを啓発する各種の展示や出版物を備えているのに対して、残念なことに、クレスピ・ダッダは、インフォメーションとなっている建物に小さなショップはあるが、それ以外の場所は、一部が居住空間となっているためか、展示や説明のための博物館のような施設（ニュー・ラナークには例えばウォーター・ミルなどの工場施設やエキシビション・センターがある）がなく、訪問者の自由な散策に任せられているだけとなっている点は、物足りなさを感じさせられる。

そうではあっても、オウエンの試み同様に、理想社会を実現するために、短期間ではあるにせよ命脈を保つことができたクレスピー族の試みは、高く評価するべきではないだろうか。

参考文献

Commune di Capriate San Gervasio, *Crespi d'Adda*.

岩波書店辞典編集部 [2013] 『世界人名辞典』。

丸山武志 [1999] 『オウエンのユートピアと共生社会』 ミネルヴァ書房。

マンフォード著・月森左知訳 [1997] 『ユートピアの思想史的省察』、新評論。

水田 洋/水田 珠江著 [1971] 『社会主義思想史』 教養文庫。

⁽¹³⁾ スミスやリカードなどの古典派とマルクスの相違の一つは、『資本論』で言えば、第7篇「資本の蓄積過程」、そこでは資本蓄積の長期趨勢だけでなく、資本関係それ自身の再生産が展開されている、とされる。こうしたロジックを有するとの認識が、かえって古典派に存在した実証的手法を等閑視させ、将来社会像の探求に向かわせない理由となったのではなかっただろうか。